

之内

袋井宿 I

—東(田代)本陣—

見附へ一里半



1994

袋井市教育委員会



第1図 東海道及び東本陣位置図

1. 調査の経緯

平成2年の調査地は、先年より東本陣の推定地として注目されていた。当該地は、明治期に郵便局となり、その後入居者が変わり今日に至っている。この建物の取り壊しに際し、地主の山中秀男氏のご協力を得て、主任学芸員の加藤理文を担当者として平成2年11月13日から約1週間調査を実施した。調査は、遺構の保存も考え、上面の遺構の調査を中心に行った。

続く平成3年の調査地は、先年の調査地の北東に隣接する地域である。建物の立替えに際して、地主の鈴木一夫氏のご協力を得て平成3年6月17日から約1週間調査を実施した。記録保存を中心とした調査であり、下層面の状況についてもいくつかの良好な所見を得ることができた。調査担当は、学芸員の白澤崇が行い、本紙の編集も合わせて行った。【白澤 崇】

2. 歴史的環境

袋井宿は、元和二年(1616)に設置された。絵図によれば、東西5町15間で、宿内的人数は843人、家屋の数は195軒を数えていた。宿泊施設には本陣が3箇所、旅籠が50軒有り、本陣は東本陣・中本陣・西本陣とされていた。特に、東本陣は「老番御本陣」と呼ばれ、三本陣の筆頭に掲げられていた。東本陣の当主は代々、八郎左衛門と称し、田代家が管理していた。

三本陣とも建坪は200坪前後で、天明七年(1787)の東本陣の居屋敷坪数等書上によれば、居屋敷坪数1068坪(その内、御伝馬地270坪、御他領798坪)、建坪322坪(その内、堀34坪)と記されている。

こうした威容を誇っていた本陣も、天明五年(1785)に提出された嘆願書に見るように、しだいに貧窮化していったようである。また、安政大地震(1854)では、本陣のみならず、袋井宿全体に多大な被害が及んだようである。【白澤】

3. 平成3年度の調査

本調査区からは、土層の観察によって焼土と炭化物の混在した層を三層確認した。調査の事情によって下層の調査を詳細に行うことはできなかったが、以下では最上面で確認した焼土1の上面の礎石を中心に述べる。

礎石の周辺及び下面には拳大の礫を十数個配し、礎石を支える構造を呈している。この礎は所謂根固め石と考えられるが、下の地盤が軟弱なためか、通常よりも多い量を使用している。

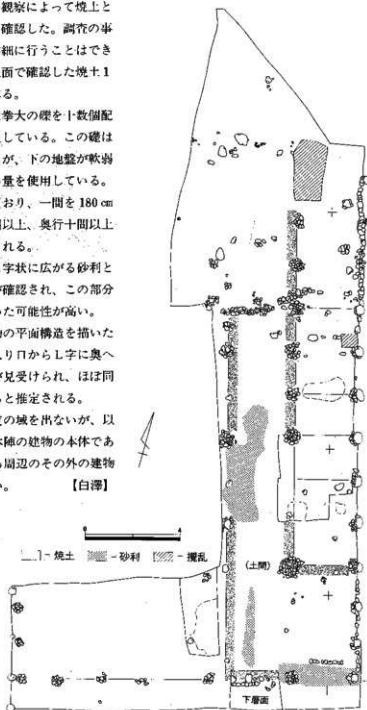
礎石は規則的に配されており、一間を180 cmに換算した場合、間口三間以上、奥行十間以上の細長い建物が一軒想定される。

この建物の内部には、L字状に広がる砂利と強く叩きしめられた部分が確認され、この部分は土間として使用されていた可能性が高い。

東本陣とその周辺の建物の平面構造を描いた絵図には、前述のように入り口からL字に奥へ伸びる土間を設けた建物が見受けられ、ほぼ同じような構造を呈していると推定される。

一部分の調査のため推定の域を出ないが、以上の構造の建物の場合、本陣の建物の本体である可能性は少なく、むしろ周辺のその外の建物の一部である可能性が高い。

【白澤】



第2図 平成3年度調査区平面図



写真1 平成3年度調査区全景

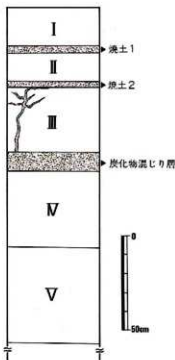
4. 平成4年度の調査

本地区は、上層の観察から二時期にわたる焼土と炭化物の混在した層を確認している。先ず表土を除去すると、最上面の焼土1が現れ、この下から基本層のIIを基盤とする礎石と雨落ち溝を検出した。建物全体の半分しか調査できなかったため、推定の域を出ないが、10m40cm×4m80cm（1間を160cmで換算すると6間半×3間）の建物が一軒あり、その周囲には、方形に取り囲む雨落ち溝が確認された。この溝は、断面U字の溝を掘り、その底面近くには細かな砂利を敷き、上面には30cm前後の石を均等に配して排水を良くしている。

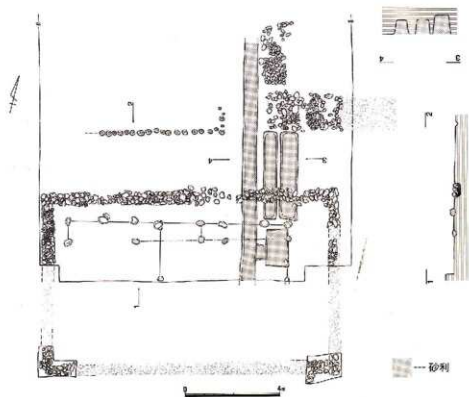
この建物の礎石と、方向をほぼ同じくする礎石列が、すぐ下面で確認された。この礎石列は、焼土2の下面から検出したもので、基本層のIIIを基盤としている。ただし、先に触れた上層の建物によって、破壊を受けて全容は明らかでない。

さらに以上の礎石列の下には、長方形の土坑と溝に細かな砂利を敷き詰めた遺構を確認した。その性格は不明であるが水の排水を考慮した遺構と考えられる。

基本層のIII層内からは噴砂が観察され、その上端が焼土2で止まっていることから地震による火災が想定される。【白澤】



第3図 基本層序



第4図 平成4年度調査区平面図



写真2 平成4年度調査区全景

5. 絵図と調査区の比率

袋井宿関係の絵図の中に「袋井宿絵図」があり、正確な作成年代は不明であるが、袋井宿の町並を詳細に描き出している。この絵図の中には建物の間口が記されており、現存する小路との対比によって、現在の地図上に置き換えることが可能であることが想定された。まず、宿の中心を南北に貫く親福寺小路を基点に東へ玄明小路までの区間を一問 180 cm に換算して地図上に記入したところ、絵図と現在の距離との間には大きな差があった。そこで一問を 160 cm に換算して同じ作業を行ったところほぼ絵図どおりの間隔であることが解った。これが偶然の一致で終わらないために、親福寺小路から西側の町並についても間口の記載を基に地図上に当てはめてみた。その結果、現在の町並に非常に良く合致することが証明された。つまり、「袋井宿絵図」は作成当時の宿場の状況を規模・距離・配置の面において忠実に描き出していることになる。

更に先の分析で得られたメートルに換算した建物配列を、昭和以前の地籍図に当てはめるこの作業を行った。この結果から建物と建物の境、つまり土地境の多くが絵図から得られた間口幅と合致してくることが明らかとなった。このことは、当初あった土地が年月を経るに従って分割はされるものの、元の土地境は連続と踏襲されていくケースが多いことに起因していると考えられる。この論理に立てば、本陣という宿場内で最も広い面積を有する建物は、その時代の事情により盛衰を繰り返し、そのたびに建物の規模を変えたと想定できる。しかし、土地の大きな枠は後まで残存すると考えられ、地籍図で大きな区画の位置を辿るとその場所が本陣である可能性は高い。右に掲げた図は、以上の一連の作業の結果であり、東西の本陣の位置は図の1・2、調査区はA・Bに対応する。



第5図 東本陣建物配置図

【白澤】

6. 出土品について

今回の発掘調査では、陶磁器・銭・釘等の鉄製品・瓦や土管などの様々な生活用品・建築部材部材などが出土した。その中でも特に多く出土したのは陶磁器類である。陶磁器類のうち圧倒的に多く出土したものは茶碗や湯飲み、皿類などの飲食関係のもので、すり鉢や鉢等の台所で使うものは少なく、宿場町出土陶磁器の種類の特徴を現すものと思われる。茶碗で同形態、同文様のものが5～6組出土するものがある。これなども、宿場での陶磁器の特徴となろうか。また、数少ないが仏壇で使う花生、文房具の水滴、素焼きのかわらけなども出土している。出土した陶磁器類の産地は、九州の肥前産（伊万里もの）の磁器、愛知県の瀬戸産（瀬戸もの）の陶磁器、滋賀県の信楽焼の陶器、地元静岡産の志戸呂焼の陶器などが見られたが、信楽焼・志戸呂焼の出上量は少ない。陶磁器の時期は焼土1面からは19世紀中～後半、焼土2面からは19世紀中～前半、焼土2面下層からは18世紀後半～18世紀前半のものが出土しているので、今回の発掘調査で発見された遺構と地表面より1.5mまでの整地上は18世紀後半～19世紀中頃の時期となりしかも20～30年に1回程度袋井宿が火災にあっていることがわかった。

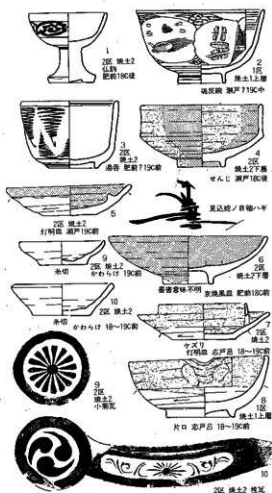
瓦は棧瓦と小菊瓦が出土している。ほかに鬼瓦の破片も出土しているが、いずれも幕末のものと思われる。

7. まとめ

発掘調査による遺構の状況と、絵図との対比を総合すると平成3年度の調査区は本陣の中心建物ではなく、むしろ脇に付設される建物か、まったく別の建物である可能性がある。

今回は僅かな面積と期間で調査を行った成果の概要を記した。しかし、絵図との対比の当否には、より多くの面的な発掘調査の推進が必要と思われる。第5図のCの小路は、建物と畑の境を表していることが絵図から解り、こうした事実関係の積み重ねが宿場内の本陣解明には必要で、現代における宿場を取り上げた実態のない催しへの警鐘となろう。

【白澤】



第6図 代表的な出土品実測図（陶磁器縮尺=1/3
瓦縮尺=1/4）



写真3 肥前・瀬戸産磁器



写真4 肥前・瀬戸産陶磁器



写真5 志戸呂焼陶器・かわらけ



写真6 瓦

【噴砂について】

平成4年度の調査区の一部で、僅かながら噴砂を確認した。第3図の模式図で示したように、その上端は基本層Ⅲの上面、つまり焼土2の下面で地上に吹き上げられている。

このことは、焼土2の火災がこの噴砂にともなって起こったことを示しており、この焼土内の遺物やⅢ層の年代観からすれば（6節参照）、安政大地震（1854）にかかわるものである可能性が高い。

【白澤】



写真7 噴砂（平成4年度調査）

《調査協力》秋山兵三 向坂隆二 寒川 勉

《編集協力》加藤理文 早川保子 森井雅彦

袋井宿Ⅰ－東(田代)本陣－

〈東(田代)本陣推定地発掘調査報告書〉

1994年3月25日

発行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市新屋一丁目1番地の1

印刷 株式会社 開明堂

〒430 浜松市中沢町1-1